

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成22年 9月14日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 菊 地 大 樹

事業区分	平成22年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	11th International Council for Archaeozoology (2010年度国際考古動物学会国際会議)	
発表題目	The sacrifice of horse during the Pre-Qin Age in China	
開催場所	フランス・パリ	
渡航期間	平成22年8月22日 ~ 平成22年8月29日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空運賃 265,000円に充当

## 成果の概要

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻  
博士後期課程3年 菊地 大樹

京都大学教育研究振興財団の助成を受け、2010年8月23日～28日にかけて、フランスのパリにおいて開催された、第11回 International Council for Archaeozoology (世界考古動物学会議)に参加し、ポスター発表をおこなった。

会議は4年に一度開催され、遺跡から出土する動物遺存体を中心として、考古動物学的分析の新成果や新視角を発表する場となっており、当該分野における最前線の研究状況がどのようなものかを知る目的もあり、発表参加することにした。今回の会議は、旧パリ市内に位置する Pierr et Marie Curie 大学 Paris の Jussiu キャンパスと国立自然史博物館が会場となり、58カ国から過去最高の717名が参加し、33のセッションに分かれ、803(Oral 432/Poster 368)もの発表がおこなわれるなど、非常に活気あふれる会議となった。

報告者は、「Contributions of Archaeozoology in the Study of Human Societies in South, Southeast, and East Asia from the Paleolithic to the Premodern Era」というセッションにおいて、「The sacrifice of horse during the Pre-Qin Age in China」という題目で、24、25日とポスター発表をおこなった。

発表内容は、これまで日本において考案された、ウマの体高推定および年齢推定の考古動物学的分析方法をもちい、中国先秦時代におけるウマの体高および年齢の推定復元をおこない、犠牲となったウマの体高および年齢の変遷をおったものである。

本発表の目的のひとつには、考古動物学的分析方法をどのように考古学的解釈へ発展させることができるか、その展望を提示することにある。考古動物学的分野は、今日よりミクロな分析に特化していく傾向があり、優れた研究が発表されるなか、実際にその分析方法をどのように現場に応用していけばよいか、といった展望にまで踏み込んだ内容があまりない。そのため、本発表は具体的な応用例となる。

今回の会議では、これまで口頭発表では質疑応答の時間が限られていることから、議論の時間がとれるポスター発表も重視され、発表では活発な議論が展開された。報告者は今回がはじめての国際会議の参加でありやや緊張した感もあったが、多くの研究者から質問をうけ、これまで課題としていた視点の再認識や、想定外の質問をうけ新視角を教示されるなど、刺激ある知見を得ることができた。特に、これまで課題としていた視点において、専門的に分析をおこなっている研究者と面識をもつことができ、今後、共同研究へと発展させられる可能性がでてきたことも成果の一部としてあげられる。また、前回4年前の会議では、安定同位体分析、古代DNA分析など萌芽的な段階であった分野の分析方法が、今回の会議では主

流となっており、世界において中核になりうる研究がどのように進展していくのか、その現状を実感できたことも、今後、研究をすすめていくうえで刺激となった。さらに研究とは離れるが、会議の発表形式もまた興味深いものであった。口頭発表の合間にポスター発表の内容をトピック的に発表し、広く意見を募る発表形式は、これまで自身が所属する学界ではみられないものであり、個々にしか対応できない側面もあるポスター発表の発展型として、今後の可能性を感じるものであった。

このたび京都大学教育研究振興財団の助成を受け、国際研究集会に参加することができ、最先端の研究成果、方向性、研究スピードを知ることができたこと、また、多くの研究者と触れ合うことができ、今後の研究飛躍のために貴重な経験となりました。末筆ながら、感謝申し上げます。